

会 長 挨拶

森の都金沢における第18回日本核医学会総会に遠路御参会の会員各位に対し主催者側を代表し心から歓迎の意を表します。

X線 CTがはなばなしく形態診断の花形として登場して以来、一部の日本の核医学者の中には自信喪失するグループも見受けられますが、米国の核医学会に1度出席されればそのような懸念も吹飛んでしまいます。本年は丁度第2回世界核医学会が9月17日～21日米国ワシントン市で開催され、全演題663題の中日本からのものが76題を占め、5名の座長が指名され、100名を遙かに上回る大量の日本人参加が予想されています。各演者の御健闘を期待しています。

一方本学会の方は演題のメ切りが例年より非常に早くなったことや世界核医学会の後間もない不都合な時期ということで演題の集まりを危惧しましたが、応募演題は273題に達し、プログラムの関係上私共の教室からの出題は凡てカットしたことを考慮すると、悪条件にもかかわらず昨年の281題より実質上は増加していることとなります。

何れにせよ静態イメージングに最重点のあった核医学は一つの曲り角にきている事は確かです。そのような意味でプログラムを編成してみました。「臨床核医学動態機能検査法」の総括テーマの下に、12名の新進気鋭の士によって教育講演が行なわれます。お好きなテーマを選んでレフレッシュングに役立てられるとよいと思います。全部受講しようと思っても1/3しか出席できないのが欠点ですが、そのような御希望に応えるべく、全内容を単行書として明春には出版予定です。シンポジウムとしては木下、鳥塚両氏司会で「in vitro testの進歩」、飯尾氏司会で「心臓核医学の現状と将来」をお願いしましたが、今後一層発展普及を期待する分野です。

核医学の発展は放射性医薬品と放射線測定器の進歩を車の両輪として推進されていることは言うまでもありません。Single photon CTやPositron CTといった所謂Radionuclide Emission CTが一斉に開発商品として登場してくる趨勢にあります。しかしこれらのRNCTが真価を発揮できるか否かは良い放射性医薬品が開発されるかどうかにかかっています。この意味でPh. D.のDr. R. M. Lambrecht (Brookhaven National Laboratory), Dr. G. Subramanian (State Univ. of New York, Upstate Medical Center)をお招きしました。臨床医としてはDr. A. Gottschalk (Yale Univ.), Dr. H. W. Strauss (Harvard Medical School)が来日され、Dr. Straussは言うまでもなく心臓核医学の臨床、Dr. Gottschalkには放射線測定器の進歩ならびに核医学の将来といった御講演をお願いしてあります。何れも高名の方々ですので、何卒御期待下さい。プレナリーの御希望は例年通り多数ありましたが、4題に厳選させて頂きました。悪しからず御了承下さい。

最後になりましたが、8年前に金沢で始めたシンチグラム・カンファレンスは時間の都合で取止め、代わりにスキャン・クイズのコーナーを設けました。奮って御参加下さい。

プログラムの大綱の編成を終えて、本総会を如何に順調に進行させるかで頭は一杯です。最大の努力は致す積りですが、本総会が日本核医学発展の一里塚としての実り多い意義ある学会になりますよう、会員の皆様の絶大なる御協力をお願い申し上げます。

第18回日本核医学会総会

会 長	久 田 欣 一
総 務	利 波 紀 久
プログラム	森 厚 文